

大鏡における叡山仏教

渡 辺 守 順

一 序

大鏡は平安末期の院政時代に書かれた歴史物語で、伝えられている諸本は三巻本・六巻本・八巻本の三種がある。いわゆる四鏡の一で、「世継物語」とか、「世継の翁の物語」などと称され、作者は藤原為業説・藤原能信説・源道方説・源経信説などがあつて、はつきりしない。内容は文徳天皇の嘉祥三年（八五〇）から、後一条天皇の万寿二年（一一二五）までの一四代一七六年間の歴史を対話風な物語にまとめている。この作品を概観すると、構成の上で、法華八講会の影響が強く、序・本紀・列伝・藤氏物語・昔物語の五部からなり、内容をつぶさに検討すると、かなり叡山仏教の教養をもつた作者の手になつたと思われるので、どれほどのかかわりがあるかを明らかにしたい。

大鏡における叡山仏教が、どの程度の濃厚さであるかを簡単にいいきえることは難しいけれど、六巻のうち、巻四と巻六を除いて、叡山仏教がでてくるので、例によつて示せば、六

七%の濃度といえよう。『太平記』の五〇%、『平家物語』の三八%、『宇治拾遺物語』の三一%、『栄花物語』の九〇%と比較すると興味をそそられる。

二 大鏡の比叡山

大鏡の研究は多くの人のすぐれた成果があるので、かなり普及しているが、本稿では岩波の日本古典文学大系本によつて、そのあらましをみてみよう。

(一)舞台 大鏡にでてくる叡山および天台系寺院が、どんな具体的な文章ででてくるかを、ややわずらわしいが紹介するところのようである。

（比叡山） まず、ばくせんと「山」とあるだけでも比叡山だといえるものがある。

巻一「いとど山の天狗のしたてまつるとこそ、さまざまにきこえ侍れ」

これは天皇のご病気がなおらない原因を山の天狗のせいだとして記述である。

巻五①「やがてその夜、山へのぼらせ給けるに、鴨河わたりしほどのいみじうつめたくおぼえしなん、すこしあはれなりし」

これは願信が、京都の革堂行願寺で、落飾して、すぐ比叡山へ登つたというのである。

いずれも、暗い心の依りどころとして比叡山をとりあげた。

巻五②「やまの所司・殿の御隨身ども、人はらひのゝしりて、戒壇にのぼらせ給けるほどこそ、入道殿はえみたてまつらせたまはざりけれ」

右の「やまの所司」とあるは叡山の役僧のことである。

〈根本中堂〉

巻一「御くらゐさらせたまゐし事も、おほくは中堂にのぼらせたまはんとなり。ざりしかど、のぼらせたまひて、さらに其験おはしまさざりしこそ、くちおしかりしか。やがておこたりおはしまさずとも、すこしのしるしはあるべかりしことよ」

悲しい心を慰めるため、根本中堂の本尊にすがつた。

巻三「正月二七夜のほどに、中堂にのぼらせたまへりけるに、さらに御をこなひもせでおほとのごもりたり」

これは願信が出家したとき、いつこうにおつとめをしない出家生活を述べたもので、重苦しさを感じさせる。

〈横川〉

巻三①「はじめは横河におはして、のちに多武峯にはすませ給しぞかし」

有名な多武峯少将高光のことである。

巻三②「飯室権僧正」

慈忍のことである。

巻三③「いゐむろといふ所にいとたうとくをこなひてぞ、かくれ給にし。」

義懐中納言が出家して、横川へ入つたことを述べている。

巻三④「九条殿の楞嚴院」「九条殿の飯室の事など」

これは藤原師輔が建てた横川の法華三昧院のことである。

巻三⑤「横川の大僧正御房」

このほか、天台系寺院が登場するのは、巻一の「雲林院の菩提講」、巻一の「三井寺」、巻五の「かわ堂」（京都一条革堂）、「天王寺」などである。裏書では巻五に「園城寺」とある。

(二)人物 大鏡のなかに叡山関係の僧および外護者がどのような形で登場しているかをしらべるのはたいへん興味あることだが、本稿では天台僧を巻数順に列記する。同じ巻で重出する人物は一回だけ書く。

巻一（智証大師）

巻二（心誉僧都 兵衛佐 眞覚 花山院 恵心僧都 僧都

源心 多武峯の入道少将 高光 仁和寺僧正 済臣）

卷三（飯室権僧正||慈忍 禪林寺僧正||深覚 賀縁 いちむろの僧都||尋円 仁和寺別当 三味僧都如源||叡山西塔に住む 兵衛佐）

卷四（皇后宮とひとつばらのおとこぎみ||隆円||延暦寺大僧都実円の弟子 明尊||天台座主）

卷五（顕信 座主||覚慶 飯室の権僧正||慈忍 横川の大僧正御房良源）

右のうち智証大師・恵心僧都・飯室権僧正・明尊などは名僧である。このほか、藤原道長ら藤原氏一門の外護者が多く登場するがすべて省略した。傾向として、藤原氏と比叡山横川の僧侶集団とすいぶん密接な関係にあつたようだ。多武峯へ行つた高光もまず比叡山の横川へ登つていたのである。

つぎに裏書にてでくる叡山関係の高僧を列記しておく。

卷一（智証大師 増命 権僧正尋禪）

卷二（権大僧都源心）

卷三（権僧正尋禪）

卷五（大僧正覚慶 慈恵大僧正）

三 大鏡の叡山教学

大鏡にてでくる叡山教学に関する事項を分類すると三つある。①法華経②五時教③往生要集その他である。まず、法華経から、どのような扱いがされているか考察してみよう。

〔法華経〕 序の書きだしに「雲林院の菩提講」とあつて、

極楽往生を願うために、法華八講という、講説のあいまに、九〇歳の大宅世次と、一八〇歳の夏山重木の両翁が会つて歴史物語をするところへ、重木の妻と、若侍が加わつて、主に世次が歴史を語り、他の三人が聞き役で、物語が展開する。そして、「法華経一部をときたてまつらんとてこそ、まづ余教をばときたまひけれ」といつて、卷一がはじまる。卷一には「たゞいまの入道殿下の御ありさま、いにしへをきき、いまをみ侍るに、二もなく三もなく、ならびなく、はかりなくおはします。たとへば一乗の法のごとし、御ありさまの返々もめでたき也」とあつて、法華一乗を高く評価している。「二もなく三もなく」とは法華経方便品の「十方仏土中唯有二乘法、無二亦無三」とあるを引用している。法華一乗と道長を同位に考えている。

卷三には「〔略〕しばし法華経誦じたてまつらんの本意侍れば、かならずかへりまうでくべしとの給て、方便品をよみたてまつりたまふ」とある。また、「北陣よりいでたまふほどより、法華経をいみじうたうとく誦じたまふ」ともある。

卷五には「これこそはたしかにみたてまつりけめ。ただ転輪聖王などはかくや」と、道長の「御ありさま、御かたち」を「おなか世界の民百姓」が法華経安樂行品にある「転輪聖王」のようだといった。転輪とは輪宝が王を先導して一切の障害を破砕隆伏する力のあるもので、その福をもつのが転法

輪である。

また、同じ巻五に「聖徳太子つたへたまふといへども、このごろだに、むまれたるちごも法華経をよむと申せど、まだ、よまぬもはべるぞかし」とある。さらに、「三昧をこなひたてまつり」とあつて、慈覚大師が入唐して伝えた法華三昧供養を修する行事や、「わが身おもふさまになりたらば、三昧堂たてん」と法華信仰の普及のさまが記されている。

〔五時教〕天台の考え方の中心に五時八教があるが、序で「それをなづけて五時教といふにこそはあなれ」とあり、裏書の巻一に「五時教事」とあつて「華嚴 乳味、阿含 酪味、方等 生蘇、般若 熟蘇、法華 涅槃 醍醐、謂之五味云々」とある。釈尊一代の教えを五時にわけ、法華を第一とする考えで、道長は法華のようなものところでも述べている。大鏡の本紀列伝を「余教」とし、道長伝を法華になぞらえるあたり、奈良仏教の中へ叡山仏教が大きく進出したことを証している。

〈往生要集など〉

つぎに、『往生要集』ないし恵心僧都の教学が若干反映しているのに注目したい。巻一に「魚子おほかれど、まことの魚となることかたし。菴羅といふうる木あれど、このみをむすぶ事かたし」とあるのが、『往生要集』の引用である。巻二には「恵心の僧都の、頭陀行せられけるおりに、京中こそ

りていみじき御時をまうけつゝまいりしに」とある。

このほか、叡山教学の関係では、序に「灌頂」、巻二に「薬師経」などの記事がある。

以上を概観すると、大鏡における叡山教学は、法華経が仏教の中心といい、道長も同様に高く評価している。

四 結

いつもながら、ずさんな列举的考察に終るが、栄花物語と比較するとき、舞台となつた横川は同じ程度だが、登場人物において、栄花物語グループより大鏡グループがわずかに勢力が劣るかに見える。これは道長を中心においた大鏡の作者の意志が然らしめていたのである。

つまり、道長を中心にした大鏡は山階寺をとりまく奈良仏教に深いつながりがあり、むしろ弘法大師が登場することに注意したい。

参考文献

- 拙稿「今昔物語における叡山仏教」本誌第一三巻第一号
- 拙稿「宇治拾遺物語における叡山仏教」本誌第一六巻第一号
- 拙稿「太平記における叡山仏教」本誌第一七巻第二号
- 拙稿「古今著聞集における叡山仏教」本誌第一九巻第一号
- 拙稿「沙石集における叡山仏教」本誌第二〇巻第一号
- 拙稿「平家物語における叡山仏教」本誌第二一巻第二号
- 拙稿「栄花物語における叡山仏教」本誌第二三巻第二号
- 拙稿「梁塵秘抄における叡山仏教」本誌第二四巻第二号